

二十歳で故郷を離れ、十年ぶりに故国日本に帰った。

私のシベリア抑留

京都府 向井 弘

九月上旬、我々奉天北陵大学収容所の混成大隊は、黒河よりブラゴエシチエンスクへ渡河、シベリアへ第一歩をおろす。

終戦一か月もせぬ間の入ソ抑留生活。魔のシベリア、一度入って生きて帰った者のいないシベリア等々、雑多の流言の中の抑留入ソで、やはり先行き不安な日々であった。

雨の幕舎で一夜過ごしたあと、列車乗車所まで何キロか歩き貨車に詰め込まれ、いずこへ行くとも不明の何十日かの西への旅となった。用便と食糧受領以外は閉め切りの重い貨車の扉であった。

バイカル湖過ぎ河の岸辺で我々六百余人おろされ、一夜食糧警備に一人で立たされた。銃剣もなしの立哨、こ

れほど心細い歩哨は初めて、つくづく銃剣実砲のありがたさを感じたことはなかったが、事なく使命達成夜明けとなり、食事後河を渡る。

それより徒步行軍一日がかりで宿舍へ到着、ハルハタイというところと聞いた。明治節の二、三日前であった。そのころはもう零下の気温で伐採作業。気温零下三十度を下がるると作業待機、気温上昇待ちであった。

十日ほどもたっただろうか、食糧切れとの達示、作業中止が続く。連日零下二、三十度の厳寒と断食の日々、シラミの蔓延、発疹チフスの発生、積雪を食べてのアメリカ赤痢連発、食糧減と絶食により栄養失調症が続発、全員罹病、下痢発熱の最悪状態のラーゲル、日ごとに戦友の姿が消えていった。河が凍結してから、食糧到着したが、罹病者の下痢とまらず、ますます死者の数ふえるのみであった。

十二月にはいったある日、モスクワよりの巡視ありとの報、雪の中をゼネラル・マヨロ（少将）の巡視あり。我ら生残りの日本兵座ったまま、寝たままの姿で防寒姿の軍人ロシア將軍をうつろの目で仰ぎ見るのみであっ

た。その翌朝、全員服具持って宮庭整列の命あり。外へ出て驚いた。アメリカ製の新しい軍用トラックが二、三十台凍結した河に整列、全員乗車の命により重い身体を車上へ、トラックは氷上を一路イルクーツクへ。

何時間かかったか、寒風の中毛布スッポリかぶってやっとのことバーニア（浴場）到着。衣類熱射消毒中にぬるい湯で何百日目かの体ぶき、骨と皮、お互いにこうもよく瘦せたものと、だるい手でぬる湯を体にかけて洗った。浴室出て衣類装具付け収容所へ。

ここも河近くのれんが工場跡で、前の河はアンガラ川とのことであつた。ここでも毎日戦友死んでいく。

二、三日後、体格等位検査あり、ジフトロフイと決定、入院となり、第二イルクーツクの川辺の病院へ。一か月ほどして、ころは四、五月ごろか、療養所のあるシャーマンカへ移動。気温気候も大分よくなつていたが、就床のままの毎日、朝目覚めたら、両脇の戦友二人とも声をかけれど応答なく、よく見ると二人とも黒パン持ったまま永遠の眠りについていた。

今にして思えば、あのとときの心境、食べたい、帰りたい

いの思いが途切れた一時期で、無心というか死の寸前には、思考、欲望、生物としての一切がなくなる白紙となるものと知る。亡き戦友たちも栄養失調、死亡者は無心のうちに亡くなつたが、不思議に私は生き残つた。

なぜ、いろいろのこと、考え思い、運が強かつた、氣力があつた、まだ体力があつた、若かつた、若いときの苦勞が幸いした。我が家の伝承のため亡き父母、先祖が生かした。等々いろんなことが成つてであるうが、とにかく未だにお陰さまにて元氣に皆様のいろいろなお世話をさしていただいている。死んでいった戦友の願いを思いつつ、生ある限りその思いに情熱を燃やす覚悟。

さてさて私は、シャーマンカ療養ラーゲルを出て、三級患者となり、第二イルクーツクのミヤーツコンピナート（精肉総合工場）ラーゲルへ移動。歩行も大分もとに戻り、日ごとに体力も回復し、気候も良好、かたことのロシア語も話せるようになり、死亡者もいなくなり、食糧も肉工場ラーゲルの関係で、上肉とはいえぬが肉が食べられ、屋外作業が多く、三級患者で作業時間も短く、抑留二年目の正月には形だけであつたが楽しいシベリアお

せち料理もあがった。一年前の元旦は人生最悪の状況で、元旦が何日か、生きて帰れるか、何年このような生活が続くか、何人戦友が死ぬのか、どこへやられるかと、不安も消えあきらめの日々であったことをいままさらしい出しながら、いよいよタモイのことと時は移る。

昭和二十二年、厳寒の作業も終わり、春近きころ、肉工場ラーゲルよりマリタというところの小高い山へ幕舎生活、幕舎の中心に小さいベチカ（鉄製）あり、六人一幕、作業は伐採、一、二か月ほどであったが、その間高知県出身の沢谷清水二等兵の死が一生忘れられぬ。

ある日マリタの鉄道に全員行軍移動、ここで元日本大使館付武官のクリーチコフ大佐の訓辞あり。上手な日本語で「諸君はこれよりナホトカ經由舞鶴港へと向かう」初めて聞いた輸送指揮官による日本語でのタモイ通知と日本へ帰ってからの注意とお願いであった。タモイのうわさいろいろあったが、これはほんとと確信。

やはりナホトカ第一、第二、第三ラーゲルを経て五月十一日昼ごろ、貨物船遠州丸へ乗船。航路日本海上でも死亡の戦友あり。平上陸、直ちに海軍病院へ直行入院も

ある。我々の引き揚げ状況の中、舞鶴の山々、畑の麦の穂、出迎える婦人会の皆様の「永い間ご苦労さまでした」の優しい言葉、今も脳裏に浮ぶ引き揚げの舞鶴平栈橋。舞鶴訪問のたびに抑留の想い出が浮かびます。

抑留体験者の一言

岩手県 奥 寺 信 一

私は昭和二十年十月初めから昭和二十二年九月までイルクーツク市に抑留の日々を送った一人です。今思うと帰国し、現在も命があって暮らしている方々からさまざまな労働の実態について書を読み、また聞いてみますと、率直に入って私らは都会地のうちの近くでの労働作業だったので、山深くに入れられたり、炭鉱の穴の中に入れられたりはなかった分、比較的にな作業をやらされたと思っています。だから命も続き、帰国復員者の一人にもなったのかと心の奥深く思っています。

次に思い出しながら二、三の項目について綴ってみま